

婦人の生活構造に関する調査 (第1報)

—余暇的生活時間を中心に—

愛知教育大 ○金沢扶巳代 久世妙子 渡辺みよ子 松田澄子

【目的】 ライフ・サイクルの変化や、高学歴化、また、経済状況の変わりなどにより、婦人の余暇時間は増大し、余暇を有効に生かすことは、婦人の生活設計の中で重要な課題であると思われる。そこで、婦人の生活について、時間的構造と活動内容の現状を把握するとともに、諸活動の阻害要因を明らかにすることを目的とした。本報では、余暇的生活時間の実態を中心に検討する。

【方法】 1) 調査時期：昭和58年7月下旬～9月上旬

2) 調査対象：愛知県下の20歳以上の婦人157名(20歳代30名、30歳代43名、40歳代34名、50歳代23名、60歳以上24名)

3) 調査内容：①対象者の属性 ②職業生活の実態と意識 ③一日の生活時間調査(平日と休日) ④余暇活動の参加実態 ⑤余暇活動に対する意識、など

4) 調査方法：留置法によるアンケート調査

【結果】 余暇的生活時間は、文化的社会的な生活時間と一般に言われる内容を含んでいるが、その中では、平日・休日ともテレビ視聴が一番長く、次いで、団らん・休息が長い。休日になると、交際・レジャー活動が多くなる。また、余暇的生活時間を行う時間帯を行為者率を中心にみると、テレビ、団らん・休息は、朝、昼、夜にピークがみられる。

自由時間があっても子と子だった時間がとれない、家事や費用、活動の場などの制約が大きく、自由な時間が自由に使われていない。家庭外で行う余暇活動も、外食、ショッピング、旅行など、家族のためや家族と同行することが多い。